

近代初期英国農村における学校成立と遺言書作成支援網

ケンブリッジ州ウイリンガム教区の事例を中心に

高橋基泰

はじめに

近代初期イギリス農村社会における教育は、現場の作業を通して行われることが主であったように思われるが、この問題は社会経済史の分野では、主に家族の規模・構造および農業奉公人を含む雇用労働者との関連で議論される。本稿では、このような問題が提起されるにいたった経緯を研究史にそくして辿った後、ケンブリッジ州ウイリンガム教区という当時人口移入が顕著で、土地保有の細分化が進行した対象を選定し、学校設立という契機に現れる、その地の農村経済上の諸関係を明らかにしたい。

研究史

1) 「読む」ことと「書く」こと

読むことの学習は口頭で行われ、音と形象とを結びつけてなされる行為であると言えよう。¹ イングランドにおいては1500年から1700年の間、読み書きは、特定の専門家の特別な技能から、より一般的な場面で用いられる、より普遍性を帯びた行為に転じていった。² その動機としては聖書を読むことが中心³であ

1 D. Cressy, *Literacy and the Social Order* (Cambridge, 1980) (以下 *Literacy*. と略記), p. 20.

2 M. Spufford, *Small Books and Pleasant Histories* (Cambridge, 1981), p. 15; J. Goody & I. P. Watt, 'The Consequences of Literacy, *Comparative Studies in History and Society*, 5 (1963), pp. 304-345; J. Goody, *The Domestication of the Savage Mind* (Cambridge, 1977), (邦訳J. グディ著吉田禎吾訳『未開と文明』1986年 岩波書店)。

るが故に、ごく下層の者の間でも読みたいという欲求があった。⁴ ここで注意しておかねばならないのは、読むことは書くことより容易であるという点である。また、遺贈のために作成される文書である遺言書に、遺言者なり遺言執行者・遺言立会人なりが署名をし始めるのは17世紀になってからのこととされるけれども、署名できたことが即書く能力があったとするわけにはいかない。⁵ 一方で、当時は文盲が社会の全階層に存在していたと考えて差し支えないと思われるが、傾向としてはより裕福なものの識字率が高かったようである。⁶ それはまず実益のためというのが妥当な見方ではあるまいか。例えば村であっても行政職にある者が識字能力の必要性を感じることは多くなりつつあった。⁷ また村落社会でも次第に増えつつあった金銭貸借にしても、計算能力もさることながら借用証書の作成には読み書きの能力が必要であったと考えられる。⁸ 都市に住む者はもちろんのことながら、農村にあって市場に向く者はやはり交易上の便宜から識字能力の重要性を感じることは少なかったであろう。⁹ 職業・身分で言えば日雇い・奉公人・婦人層は概ね識字率が低い。また各家庭ごとに教育に対する態度も異なる。それ故、ある家族はもとは裕福で識字能力もあったのが貧しくなると文盲になるが、ある家族は貧しくなっても家族の伝統として識字能力を保つ。¹⁰ 専ら教会検認記録を用いて近代初期イングランド

3 M.Spufford, *Contrasting Communities*(Cambridge,1974),p.152.

4 K.Wrightson and D.Levine, *Poverty and Piety* (London,1979) ,p.152; V.Skipp, *Development and Crisis*(Cambridge,1979),p.83. より早い時期についてはE.Duffy, *The Stripping of the Altars*(Yale,1992).

5 M.Spufford, *Contrasting Communities*,p.181, K.Wrightson and D.Levine, *Poverty and Piety*,p.147.

6 D.G.Hey, *An English Rural Community: Myddle under the Tudor and Stuart Periods*(Leicester,1974)(以下 *Myddle* と略記), p.190; K.Wrightson and D.Levine, *Poverty and Piety*,p.195.

7 D.Cressy, *Literacy*, p. 10, K. Wrightson and D.Levine, *Poverty and Piety*, p.152 ; V. Skipp, *Development and Crisis*,p.83.

8 M.Spufford, *Contrasting Communities*,pp.212-3.

9 M.Spufford, *Contrasting Communities*, p.206 ; K.Wrightson and D. Levine, *Poverty and Piety*,p.152.

10 M.Spufford, *Contrasting Communities*, p.207 ; K.Wrightson and D. Levine, *Poverty and Piety*,p.151.

における識字率を算出したD.クレシィによれば、教育と識字能力とは相当高い関連性がありながらも必ず結びつくものではない。¹¹ にもかかわらず、教育は上下・貧富の差を押し広げる一因であったらしいことを、K.ライトソンらはエセックスの一村落の事例から導出している。¹²

2) 奉公・従弟入りにおける教育的意義

P.アリエスも『〈子供〉の誕生』で示唆するように、当時の教育は現代我々の受けるようなものとは考えにくい。¹³ 幼年・青少年が実際の仕事場で、特に奉公 service・従弟 apprentice に出ることで、いわば実地に各職業における技能をみがいていったという状況の方がむしろ一般的ではないだろうか。そこで以下問題とする奉公人 servant について簡単に説明したい。J.ハイナル以来、晩婚・結婚即世帯の独立・未婚の青年男女が奉公人として他人の世帯に転々と寄寓していくことは北西ヨーロッパ世帯形成の特徴とされる。¹⁴ 近代初期イングランドにおいても、農業奉公人は通常未婚のごく若い男女で、家畜の世話を含めた労働を行いつつ雇用者の世帯に住み込み、衣食住を提供されていた。手工業者の従弟期間は通常7年間だったが、農業における奉公の契約期間は1年が相場であり、契約終了後は奉公先を変え移動していった。この農業奉公人ないしサーヴァントは、家族および親族関係と人口移動とを積極的に関連づけるA.クスマウルの研究が刊行されて以来、論者の注意を引き始めている。サーヴァントは、農業を中心とする生活に欠かせない技術・経験の伝播や保持のため、小さからぬはたらきをなしたと推測される。かれらの移動は比較的距離

11 D.Cressy, *Literacy*, p.53.

12 K.Wrightson and D.Levine, *Poverty and Piety*, p.175.

13 P.Aries, *Centuries of Childhood*, (Penguin Book, 1973) (邦訳P.アリエス著杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生』1980年 みすず書房).

14 J.Haynal, 'Two Kinds of Pre-industrial Household Formation System', in R. Wall, J.Robin and P.Laslett, eds., *Family Forms in Historic Europe* (Cambridge, 1983), p.69. cf. J.Haynal, 'European Marriage Patterns in Perspective', in D.V.Glass and D.E.C.Eversley, eds., *Population in History; essays in historical demography* (London, 1965).

に収まるが多かったようだ。¹⁵ そうした具体的な範囲を考える際、平均半径10—15マイル程度の経済的・社会的生活圈の存在が、古くから知られる奉公人の労働力市場（雇用市 *hiring fairs*）とも重なる形で指摘されている。¹⁶ その起源はかなり古いらしく、中世末期イングランドにおける村落生活についての研究において、B. ハナウォルトは、15世紀後半および16世紀初頭に作成されたベドフォード州の遺言書では、名づけ親（キリスト教においては名付け子の洗礼の際、同性の者2名、異性の者1名が名付け親として立ち会う）という家族外にも広がる紐帯は、同一村内もしくは近隣地域における奉公人の選択と重なり合うということを指摘している。¹⁷

他方、16世紀頃の農業奉公人の労働・生活の実態についてはほとんど知られていない。¹⁸ 1518年から1605年までのウイリンガムにおける遺言書 220件のうち、20件の贈与が奉公人・メイドになされている。この20件を検討してみても、奉公人とメイド、奉公人でも農事奉公人と家事奉公人とを峻別することは無理

-
- 15 A. Kussmaul, *Servants in Husbandry in Early Modern England* (Cambridge, 1981) (以下 *Servants.* と略記).
cf. W. Hasbach, *A History of the English Agricultural Labourer* (London, 1908) (以下 *English Agricultural Labourer.* と略記), 特に chap. 1.
- 16 W. M. Williams, *A West County Village, Ashworthy; Family, Kinship and Land* (London, 1963), pp. 38-41, 53-83, M. Spufford, *Contrasting Communities*, p. 57, 151; K. Wrightson and D. Levine, *Poverty and Piety*, pp. 74-9, 101; D. G. Hey, *Myddle.*, p. 190. 中世の雇用市についての叙述は W. Hasbach, *English Agricultural Labourer.*, p. 32, 近代にはいってからは, *ibid.*, pp. 84-5. A. Kussmaul, *Servants.*, chap. 4 and 5.
- 17 B. Hanawalt, *The Ties that Bound* (1985, Oxford), p. 246. しかしながら、彼女の想定では、名づけ親制度の機能は、ずっと小さいものであった。その点に関しては、生産の単位が共同体ではなく個々の世帯であったからだ、という理由づけがなされている (*ibid.*, p. 265.)。
- 18 17世紀になると、断片的な情報が多く18・9世紀の叙述ほど詳しくはないけれどもかなりのことはわかっている、A. Kussmaul, *Servants.*, pp. 31-48. 北部の事例ではあるが、17世紀のものとして D. Woodward, ed., *The Farming and Memorandum Books of Henry Best of Elmsworth, 1642, Records of Social and Economic History*, NS. 8 (London, 1984). ハッセル＝スミスはノーフォーク北部の1村落における労働組織を描写する背景として43件の各家屋における構成員の状態と住人の社会経済的条件とを一覧表において提示している。そこではサーヴァントも登場する: A. Hassell Smith, 'Labourers in Late Sixteenth Century England: a case study from north Norfolk (Part I)', *Continuity and Change*, 4(1) (1989); do., 'Labourers in Late Sixteenth-century England (Part II)', *Continuity and Change*, 4(3) (1989).

と言ってよい。それでも遺言者が店を構えており奉公人への言及のある場合、その奉公人は農事に従事している可能性がより高い。例えばロバート・ワードは1598年の遺言書で彼の名づけ子であり奉公人であるリチャード・ビダルに言及する一方で、以前にロバートに奉公したトマス・アダムについても遺言書で触れているのである。¹⁹ こうした場合、B. ハナウォルトも述べるように、奉公人は名づけ子と同様の贈与をうけていることが遺言書では明白である。²⁰ 一方A. クスマウルが指摘するように、子供を奉公にやるということは、教育の一環として相当に裕福な家庭でも行われていた。²¹

3) 近代初期における学校教育

L. ストーンは近代初期イングランドにおける学校教育の歴史を主として大学入学に関連する史料を用いて研究し、1558年から1700年までの時期「教育革命」とでも言うべき状況が現出したことを説いている。²² しかし、彼は専ら社会の上層に集中した議論を展開しており、D. クレシィ、M. スパフォドらは農村社会における教育の役割を論じるという立場から、小農層出身でグラマー・スクールなどを経た後大学教育を受けた者よりも、農村大衆一般の識字能力を知ることの方がより重要なのではあるまいか、という問題を提起している。²³ また文盲であることが、社会生活を送るにあたり、負い目となるとされること

19 Cambridge University Library. (以下C.U.L.と略記), Willingham registered wills, RobertWard, VC19:313(1598).

20 B.Hanawalt, *The Ties that Bound*, pp.314-7.

21 A.Kusmaul, *Servants.*, p.100.

22 M.Spufford, *Contrasting Communities*, pp.207-8; L.Stone, 'The Educational Revolution in England, 1560-1640', *Past and Present*, 28(1964); do., 'Literacy and Education in England, 1640-1900', *Past and Present*, 42(1969).

23 D.Cressy, *Literacy.*, p.76. なお1750年以降のイングランドにおける産業革命の進行の中における教育については、概説としてM.Sanderson, *Education, Economic Change and Society in England, 1780-1870*(London, 1983)(邦訳M. サンダーソン著原剛訳『教育と経済変化』早稲田大学出版部). 16・7世紀に関する状況を随所にはさみながら考察しているのがD.Vincent, *Literacy and Popular Culture: England, 1750-1914*(Cambridge, 1989). またスコットランドを主たる対象地域としながらもイングランドとの比較を行っているのがR. A.Houston, *Scottish Literacy and the Scottish Identity*(Cambridge, 1985).

の少ない時代状況であったことを忘れるべきではあるまい。ストーンはまた、イングランドを北部・西部と東部・南部とに大別し、識字能力にも前者が劣るものとみなしているけれども、D.クレシィにより、議論はより複雑であるとの修正をもとめられている。²⁴ クレシィは裁判所における宣誓証人 deponentsの署名記録をイングランドの地域別に集計し、以下の結果を得た。ダラム州のヨーマン層は例外的に高い文盲率を記録するけれども、イングランド全体としてはむしろ階層を同じくする者はほぼ一様の識字能力を示すものとみなせる。経済的余裕のある、社会的にも身分の高い階層は高い識字率を示すのが一般である。クレシィによれば、16世紀後期から17世紀にかけてヨーマン層は概ね7・8割の識字率を、ハズバンドマン層は2・3割を示している。²⁵

なお地域共同体レベルでの研究に関しては遺産目録や遺言書を用いて相当深化しており、シュロップ州ミドゥルにおける学校では、少なくとも初等教育に関しては貧富の差があまりなかったらしい点で、ウイリンガムの場合と同様である。²⁶ だが一般に、本稿で対象とするウイリンガムのように大きい村落、あるいは人口密度の高い村落では、少なくとも学校経営の継続性は大きいということが言えそうである²⁷。

イングランドにおいては16世紀前半から次第に学校の設立は目立ち始めているが、エリザベス期、つまり1560年代から一つのピークを迎える。ところがそのピークも1580年代までで、1580年代から1610年ごろまでの時期は、D.クレシィによれば教育的後退の時期であった。特に1950年代の経済的危機は、イングランドのみならずヨーロッパ全体に深刻な影響を与えており、イングランド全国では新たに学校が24校のみ設立されている。²⁸

24 D.Cressy, *Literacy*, pp.123,157.

25 *Ibid.*, pp.119-21,127.

26 D.G.Hey, *Myddle*, p.189.

27 M.Spufford, *Contrasting Communities*, pp.180,184.

28 D.Cressy, *Literacy*, pp.170,193.

ウィリガムにおける学校設立

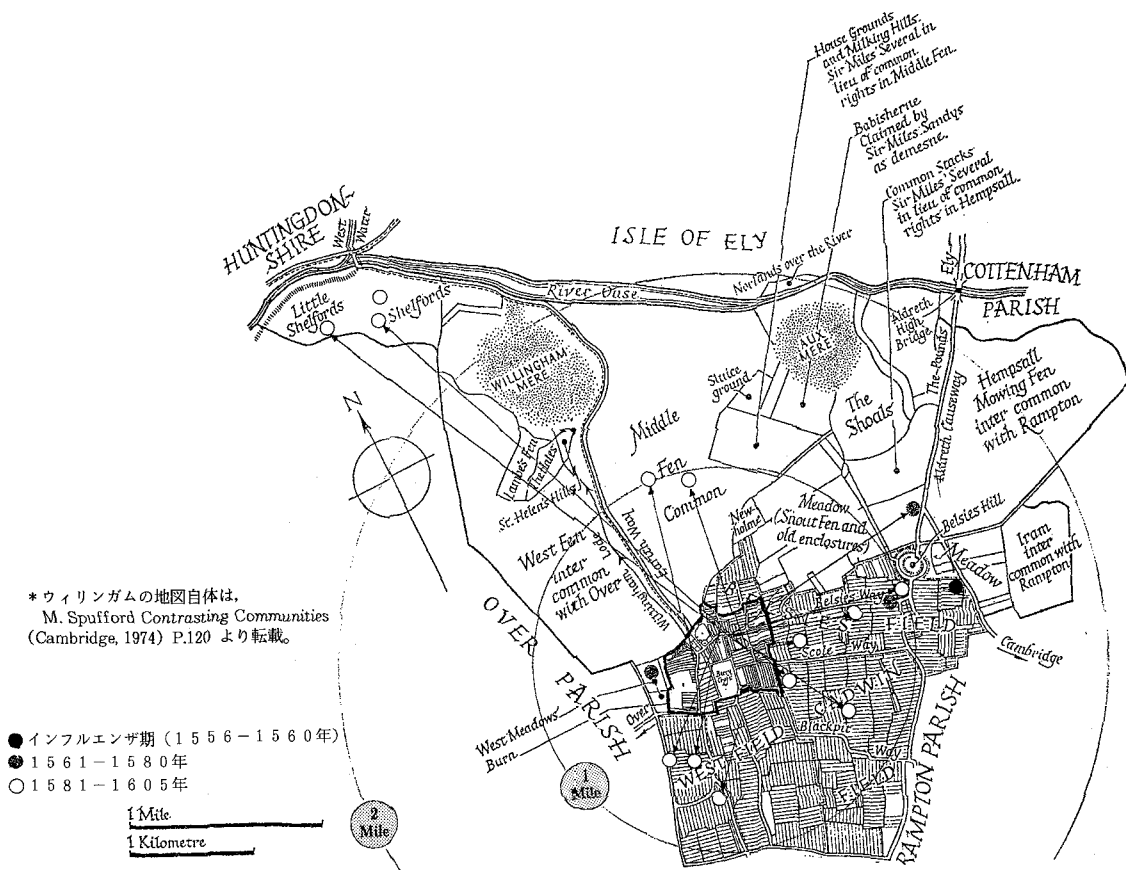
1) 背景

イングランド東部ケンブリッジ州に属し、沼沢地縁りに位置するウイリングムの共同体は、沼沢地（及び森林）を景観に抱く土地柄に見られるような独特の社会経済を成立させていた。また、共同地に産する様々の資源及び副業が盛んであった。地図では1518年から1605年の時期、遺言書に見出しうる教区内の地名への言及がおおよそ半径1マイルの中におさまることが看取できる（地図1）。ついで半径2マイルの同心円内にはあるが、ウイリングムの教区の北西端に幾つかの言及がみられる。これは、このリトゥル・シェルフォド Little Shelford と呼ばれる土地から用水 mere / lode が北に伸びており、河川を通じての交通の一つの要衝となっていたからと思われる。ケンブリッジ州のウーズ Ouse 河畔地帯における人口増加は際立つもので、データの残されている1524年から1660・70年代までの時期には移入が移出を抜くこと大であった。²⁹ 人口移入による圧力の下、基本となる農民保有地が細分化していく。1575年の時点で31単位あり、同数の者により保有されていた半ヤードランド保有地（当時夫婦および子女からなる世帯がそれぞれでどうにか生計を営めるとされた保有規模：15エーカーから25エーカーが標準）は、1720年代までには76名の保有者によって分有されていた。ケンブリッジ州の他の村では、土地無しの子の人口増加が生じていた。だがウイリングムにあっては、小屋住みよりは裕福であるが半ヤードランドは保有していない者（面積では2～15エーカーほど）の人数及び割合が17世紀に急増し、ウイリングムでは1575年当時で共同体全体の3割程度であったのが、1720年代には過半数を占めるまでになっている。³⁰

29 M.Spufford, *Contrasting Communities*, p.18.

30 拙稿「ケンブリッジ州ウイリングム教区における世代継承と人口移動：1510-1730年」『松平記念経済・文化研究所紀要』13号 1995年 87-8頁。

地図1 ウィリングガムの遺言書に見られる、教区内の地名への言及、1518年—1605年



*ウィリングガムの地図自体は、
M. Spufford *Contrasting Communities*
(Cambridge, 1974) P.120 より転載。

- インフルエンザ期 (1556-1560年)
- 1561-1580年
- 1581-1605年

1 Mile
1 Kilometre

2 Miles

2) 学校設立

イングランドにおける経済的危機の1590年代は教育的後退の時期でもあった。それ故ウイリングムでの学校設立のための募金はむしろ異色であるが、ここではその契機とそれを支える社会的経済的基盤の存在を追う。

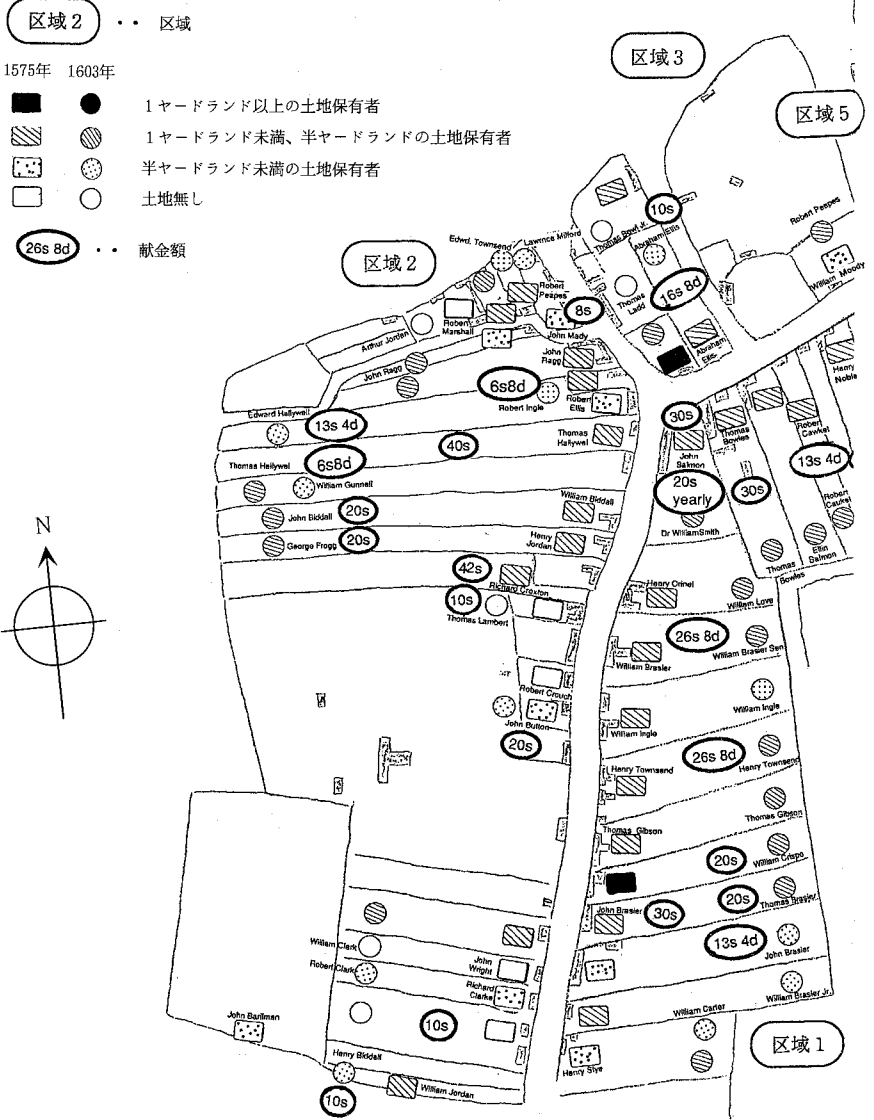
1593年、ウイリングムの村民は、村の学校設立のために寄付を募った。³¹ その人々の一覧表と額にもとづいて、1575年の土地調査および1603年の地図から得た保有地面積に関するデータと重ね合わせ作成されたのが地図2である。³² ウイリングムの村は丁度倒立した「U」の形をしている。「U」の突端には教会がありその後背に沼沢地が北に広がっている。新しく設立された学校は教会の敷地に一室設けられたものと思われる（区域3）。緑草地及び池がその東側にあった。最も裕福なヤードランド保有者及び半ヤードランド保有者層の家屋は、「U」に沿って弧を描く。土地無しの者の小屋はまず緑草地の上を埋めるが如くにして建てられている。土地無しの者はそればかりでなく、沼沢へと向かって走る2つの道路に沿っても小屋を建てるとともに、「U」東端における「貧しい」区域をも埋めている（区域12）。

ここではまず挙村一致の献金の様子が明白である。寄付者総員102名の寄付額の総額は1ないし2ポンドを平均としている。経済・社会的地位を越えて学校設立のための献金がなされていることから、当時のウイリングムの人々が教育をいかに重要視していたかが示唆されよう。多数の土地無しの人々、死期の迫る高齢者などが比較的高額の寄付をしている点が着目に値する。将来の村の教育に関して彼らに何か強い動機づけがなされていたのは疑いない。ジョンおよびウイリアム・リドレイらも土地無しでありながら寄付しているのでその好例と言える（区域12）。更に、彼らが村落中心部から離れ、村はずれtownendに住んでいた点にも注目したい。特にこの村としては比較的大きい20エーカー

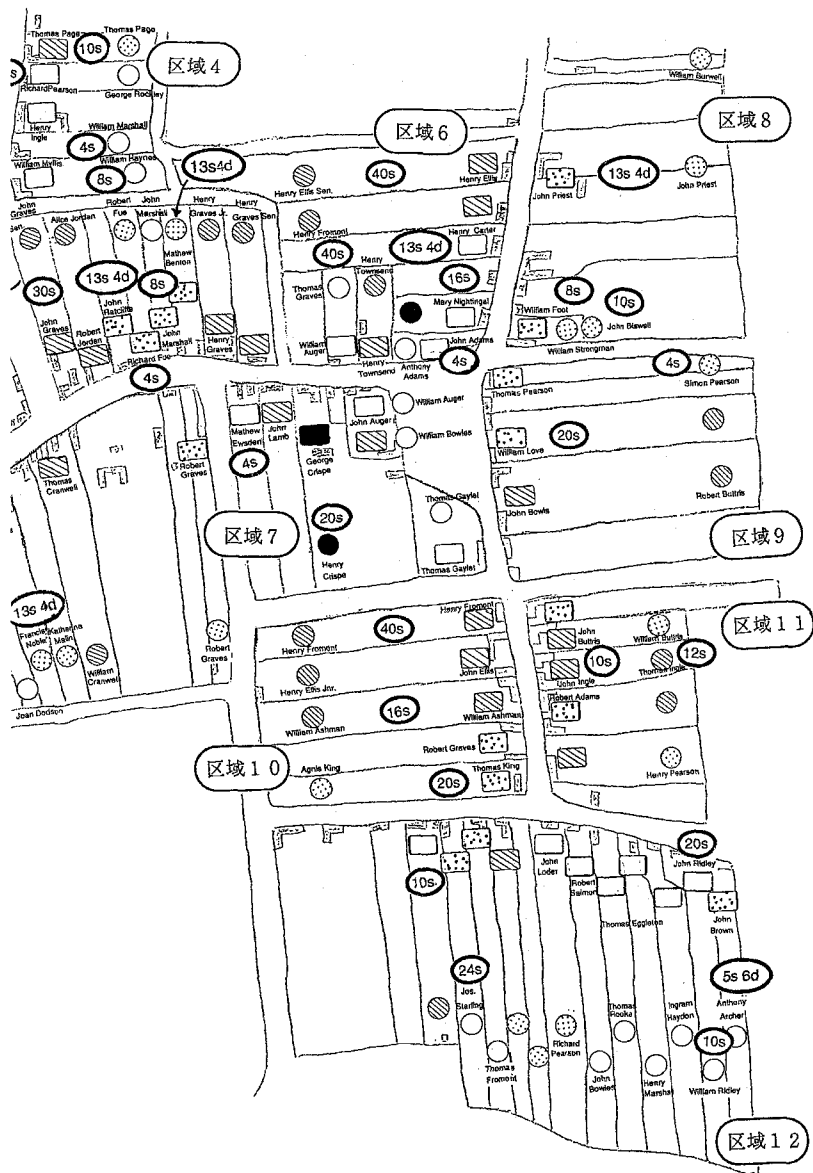
31 Cambridge Record Office (以下C.R.O.と略記), P177/25/1, pp.1-2, Town Cartulary, C.R.O. R59/14/5/10; M.Spufford, *Contrasting Communities*, pp.193-5; Cottenham Village College Local History Group, *Charity School to Village College* (Loughborough, 1968), pp.5-7.

32 C.R.O. R59/14/5/8.(a)-(f) Town Terriers and Field Books.

地図2 ウィリングダムにおける村立学校設立のための募金（1593年）



近代初期英国農村における学校設立と遺言書作成支援網



* C. R. O. P 177-25/1
 C. R. O. R 59/14/5/8. (a)-(f)
 R 59/14/5/10 より作製

の保有地を持つロバート・バタリィ（区域9，1603年側）は一銭も出しておらず、リドレイ家と縁つづきのクリस्प家の2人（ヘンリー：区域7，ウイリアム：区域1）は、1593年当時は10代と若すぎたためか、その経済・社会的地位を考慮すると以外に少ない20シリングを寄付したのみである。土地の無い人々は小職人・小商人でもあったろうが、そういう人々こそ教育の重要性を知悉していたものと思われる。あるいは肉親に近い将来教育を受けそうな幼児がいれば、全く無関心ということもなかったと考えられる。しかしながらこうした要件は、いわばいつの時代にも存在する。では、何故この時期に学校をつくることに関して村全体が強い意欲が示されたのであろうか？

1550年代後半には、インフルエンザで多くの者がウイリングムで死亡している。³³ さらに16世紀後半以降17世紀にかけてイングランド全人口の3分の1以上を占めたと推定される比較的貧しい家族³⁴をも含む移民を引き受けることで、一世代で最大限4分の3もの住民が新たな移入者と入れ替わり、村民にとって変化が具体的であった。³⁵ この16世紀後半次第に遺言書作成者が社会階層的に下降化していったと思われる。ここでおそらく細々と読み書きを教えていた学校教師のローレンス・ミルフォードがその書記役をつとめていることも教育の重要性の認識に一役買ったものと思われる。³⁶ しかし一方で、村民にある程度

33 W.G.Hoskins, 'Harvest Fluctuations and English Economic History 1480-1619', *Agricultural History Review*, 12(1)(1964), p.36; F.J.Fisher, 'Influenza and inflation in Tudor England', *Economic History Review*, 2nd.ser., 18 (1965), pp.125-7; P.Slack, 'Mortality Crises and Epidemics 1485-1610', in C.Webster, ed., *Health, Medicine and Mortality in the Sixteenth Century*, (Cambridge, 1979), pp.12, 28; do., *The Impact of Plague in Tudor and Stuart England* (London, 1985), p.57, Table 3.1: Years of high mortality 1485-1560, p.147; graph of wills from London Commissary Court 1478-1565, and P.358n.8; E.A.Wrigley and R.S.Schofield, *The Population History of England 1541-1871* (London, 1981), p.653.

34 R.A.Houston, *The Population History of Britain and Ireland 1500-1750* (London, 1992), p.83.

35 前掲「ケンブリッジ州ウイリングム教区における世代継承と人口移動」88-90頁。

36 彼については C.E.Parsons, 'Note on Horsehead Schools and Other Village Schools in Cambridgeshire', *Proceedings Cambridge Antiquarian Society*, 22, pp.108-123; E.Key, 'A Register of Schools and School Master in the County of Cambridgeshire 1574-1700', *Proceedings Cambridge Antiquarian Society*, 70(1980), pp.188-9.

の経済的余裕が必要であったろう。

村民の教育への深い関心は、ウィリアム・アッシュマンの遺言書（1567年）に端的に示されているように思われる。³⁷ 息子がグラマー・スクールに行けるようにと基金bondを組んだ遺言者であったが、一方で彼はまた息子が学校へ行かないかもしれないとも想定している。それ故彼は、そのときのために6ポンド13シリング4ペンス、財貨もしくは現金でのこしたのである。ただし、「息子が土地を扱いうるようになるまで、他の人々がそうするように、妻がその土地を維持すべき」とした。この、学校での教育に高い関心を示したウィリアム・アッシュマンの遺言書作成から30年もしないうちにウイリンガムでは村立の学校が建てられることになる。そのとき、設立のための寄付金として、息子のウィリアムもまだ16歳であったけれども相当の額を出すのである（区域10：16シリング）。また彼は後年隣人の遺言書作成にも立会い人として協力を惜しまなかった。³⁸ 彼自身はそれほど上級の学校までは進まなかったようだが、やはり彼の父親の影響であろうか教育の重要さを若くして良く理解していたと解釈される。

またロバート・ローダーは1583年の遺言書で、妻にその時点では胎児であった者を16歳になるまで養育もしも男子であれば教育をさずけることと定めた。³⁹ このとき先達である、ウィリアム・アッシュマンの遺言書のことが遺言者の脳裏をよぎったかもしれない。しかしながら、もしもその胎児が死亡した場合、その自由地つきの謄本保有地 the copy with free groundは妻アニスの生涯不動産権となることが設定されていた。だがその胎児は娘であり、幼くして死亡したのである。⁴⁰

37 C.U.L., Willingham registered wills, William Ashman, VC15:92.

38 C.U.L., Willingham registered wills, William Brasier, VC19:323 (1589); Robert Marshall, VC20:251(1594); Matthew Ewesden VC20:254(1594).

39 C.U.L., Willingham registered wills, Robert Loder, VC17:329. cf. M. Spufford, *Contrasting Communities*, p.193.

40 遺言書作成の時点でロバート・ローダーは男子を夭逝させたばかりであった, Willingham Family Reconstitution Forms, M689.

3) 学ぶ者とそれを支える者

それでは学ぶ主体である児童に目を移そう。今日と異なり、法律で就学年齢は0歳代に限定されることはなかった。P. アリエスも示唆する通り、彼らは学校へはそれが可能なときであればいつでも行ったと考えられる。⁴¹ しかしながらウイリングムで学校が創設された時点で、もしも16歳未満の子弟を選び出すのなら彼らは将来村の学校の主たる生徒になる可能性は高かったと思われる。1593年、家族復元票によれば全部で128家族が16歳未満の子弟を抱えていた。子弟の数で言えば264名になる。だが15歳以下の子弟の内でも、既に生家を去り農業奉公人や従弟になった者は相当数にのぼるであろう。あるいは生家に留まったとしても、一家の主たる稼ぎ手の一人として忙しく、学校に行く暇など無かった場合も考える。それ故、就学は実際には9歳以下の児童に限定されているとした方がよいであろう。将来彼らが村を離れ残る人生の記録を全く残さないとしても、この年齢であればなお生家に留まるであろう。このようにして、およそ百名の男子とほぼ同数の女子が村立学校の潜在的第一期候補生であったと考えられる。そして、9歳以下の子供のいる世帯主は、地図の上には38名同定されている(子供の年齢を16歳まで引き上げると47名)。⁴² 子供の人数にすると82名(男子34名、女子36名、胎児12名)のうち17名(男子10名、女子7名)が地図に表われ、かつ教区登録簿に結婚と埋葬の記録を残している(地図3)。

しかしながら、就学年齢に達した子供として女子だけがいる世帯では、一般に学校への寄付金の額は小さい。例えば娘が2人いたウイリアム・バーウェル(1575年に1ルード保有:区域8)と、5歳の娘のいたリチャード・クラーク(1575年に3ルード保有:区域2の南端)とは全然寄付していない。彼らは殆

41 P. Aries, *Centuries of Childhood*, p.317(邦訳 310頁)。D. クレシィによれば17世紀に自叙伝を書き残した者の殆どが概ね6歳から学校にいつている。そして7、8歳でいくのをやめている、という。D. Cressy, *Literacy*, p.29. いずれにせよ、両親・兄弟から読み書きの手ほどきをうけることはありうるのだが、公式の学校教育の経験が皆無という場合にはそれもむずかかったろう、とD. クレシィは推測する、*ibid.*, p.40.

42 R. Wall, 'The Age at Leaving Home', *Journal of Family History*, 3(1978).

ど土地無しであった。またシメオン・ピアソンは土地無しではなく5歳未満の娘を2人抱えていたが、寄付したのはただの4シリングであった（区域9）。トマス・ベイジは半ヤードランドを保有し、ウイリングム並みで言えば裕福な筈であった。彼には娘が3人（上から7歳・5歳・3歳）おり10シリング献金している。しかるに、彼の隣人リチャード・ピアソンは1575年には土地無しでありかつ子無しであったにも拘わらず、20シリングも寄付しているのである（区域4）彼は10年後この地で起こった農民騒擾の首謀者の1人となり領主側のトマス・ベイジと対峙することになる。⁴³

また、一家のおかれた状況が必ずしも良好でなくとも挙金する事例も説明される必要がある。まずその1つとして、学校設立のための寄付は、親族単位でなされていた可能性がある。ジョン・エリスは、献金時、8歳の男の子を抱えていたが、1銭も出していない。しかしエリス家のもう1人のメンバーが、該当する子供もいないのに40シリングも寄付している。後者の寄付は、エリス家を代表して、ということであったかもしれない。

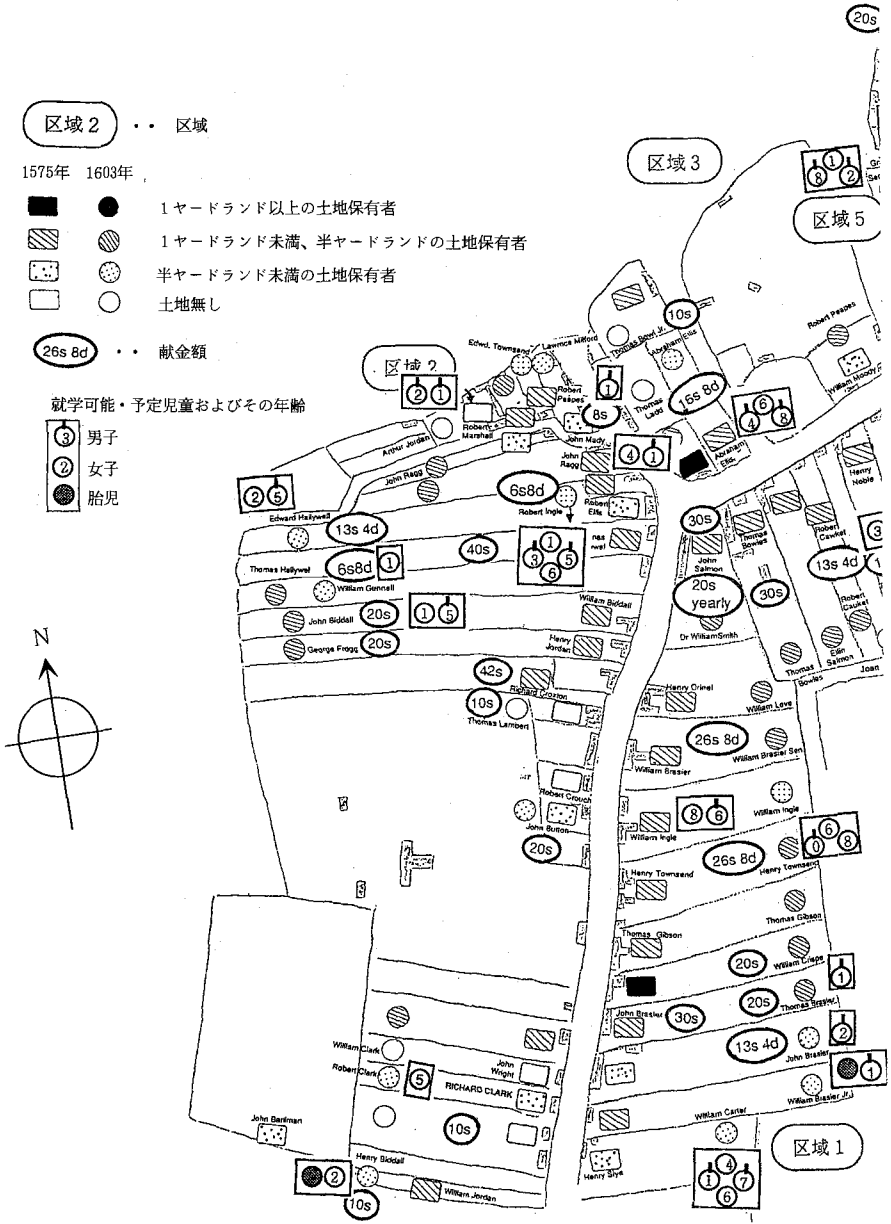
4) その成果と動因：遺言書作成支援網

学校教育の成果の一つとして、そしてまたその動因の一つともなったものとして、特に社会的・経済的差異さえも越えて行われた遺言書作成が考えられる。その点を以下述べていきたい。

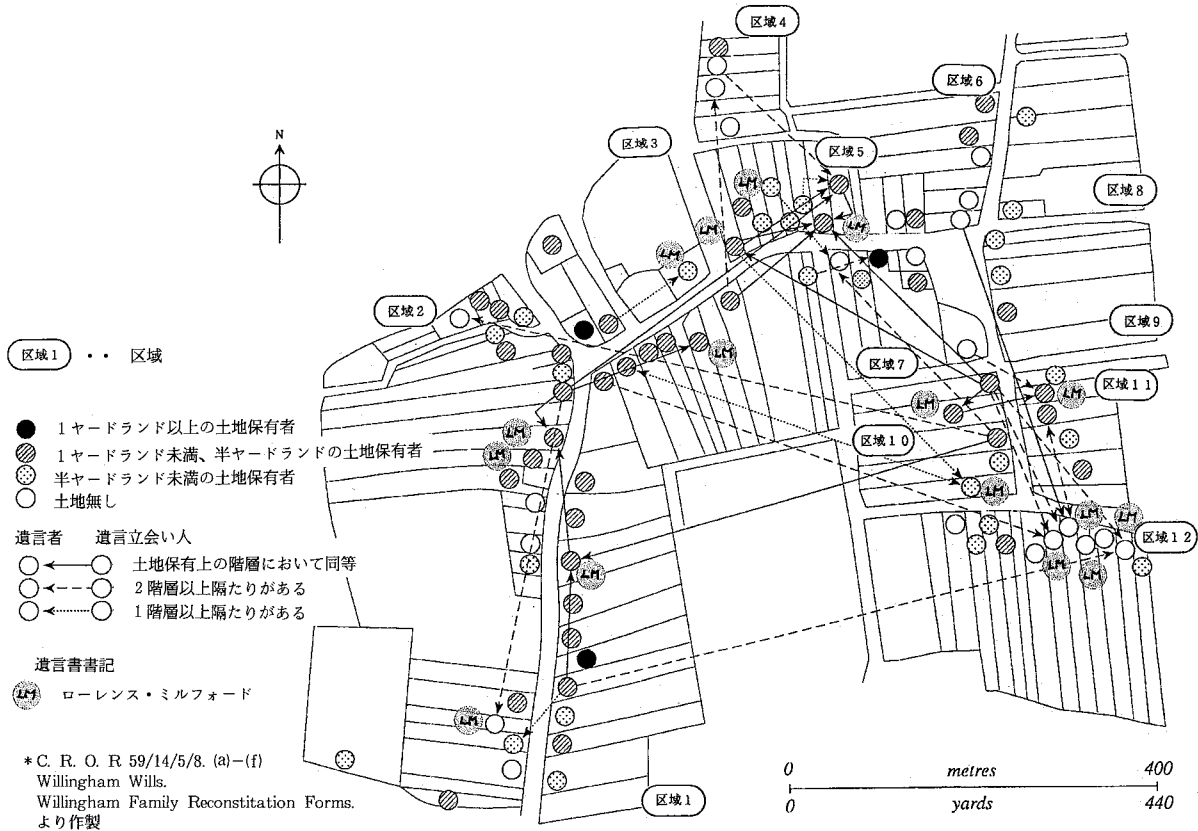
1575年～1603年および1603年～1640年の2つの時期の地図では各線で示したように、遺言立会人がウイリングムで世帯をかまえている場合、遺言作成者を指して連結した（地図4および5）。遺言執行者や遺言執行監督者の場合も示してある。まずこの村落社会における経済上の分割線を2段階以上越えていることも頻りであり、事実ウイリングムにおいて遺言書の立ち合いのための訪問で最も普通なのは、半ヤードランド保有者の階層と、土地無しの階層との間で起きたものであった。同じ階層で世帯の長たる者の遺言に立ち合うというの

43 M.Spufford, *Contrasting Communities*, pp.123-7.

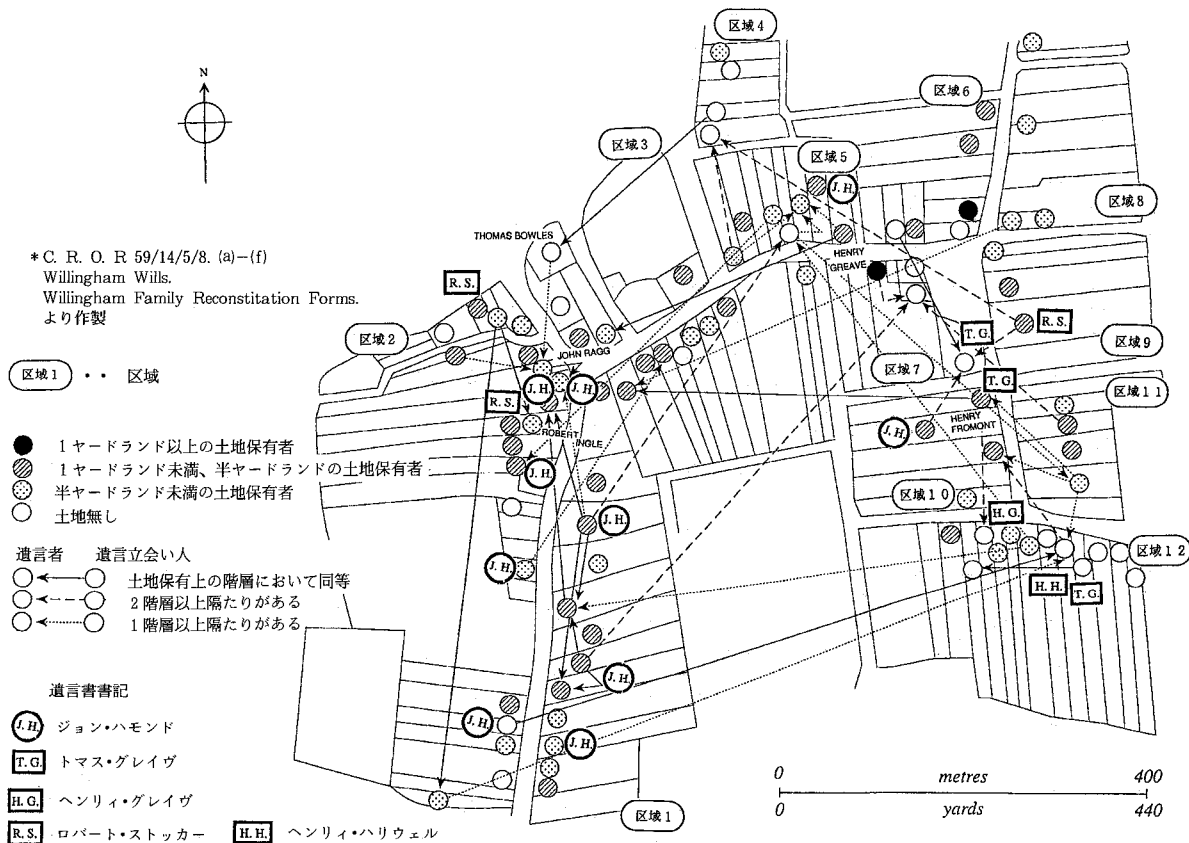
地図3 ウィリングダムにおける村立学校設立のための募金および就学可能・予定児童
(1593年現在)



地図4 ウィリングム教区における遺言書作成支援網：1575-1603年



地図5 ウィリングダム教区における遺言書作成支援網：1603-1640年



はむしろ少ないのである。⁴⁴

さらに特定の人々・区域でこのような遺言書作成補助者の集中が観察される。その中には、グレイヴ家のような、村の主要メンバーが含まれる。1603年以前は先述のローレンス・ミルフォードが遺言書作成にあたり書き手となることが実に多かった（地図4で確認できる者だけで16件）。⁴⁵ 1603年以降、ローレンス・ミルフォードの名は消え、代わりにジョン・ハモンドが頻りと登場する（地図5）。遺言書の書き手に関しては『対象をなす諸共同体』に詳しいが、ここに新たに作成された地図の上では、書記の選定が住居により決まってくる点が興味深い。この点は先年ケンブリッジ州南部のボウルシャム Balsham 教区において、宗教上異なる宗派に属する隣人同士で遺言書作成の立会いが密に行われていたことを見いだしたC. マーシュの論述と一致するであろう。⁴⁶ ジョン・ハモンドは、地図では村落のほとんどすべての区域にわたって遺言書作成の際に書き手を引き受けている。その例外となる区域（区域7・9・12）では、トマス・グレイヴ、ヘンリ・グレイヴ、ヘンリー・ハリウエル、ロバート・ストッカーが書き手になっている。この区域はまた、比較的貧しい区域でもあり親族関係が密でもある点重要であると思われる。そしてこの区域において書き手となった者は、他のより裕福な区域に居を構え村落の主要構成員でもあったようだ。そのため、親族の紐帯に頼って生き伸びようとするあまり裕福でない構成員に対して影響力を持ったと推測される。またこの区域では相当数の家族が強い連帯を示している。例えば、ヘンリー・グレイヴは彼の妻を遺言執行者 *executorix* に指名した。遺言立会人は、グレイヴ家の者から3名、それに加うるにトマス・クランウエルとヘンリー・フロモントが選ばれている。このへ

44 地図では各種の線で示したように、遺言立会人がウイリングラムで世帯をかまえている場合、遺言作成者に矢印を向けて連結した。遺言執行者や遺言執行監督者の場合も示してある。しかし、こうした家屋の粗末さはより豊かな親族の来訪を何ら妨げるものではなかったのである。

45 1603年以前の彼の住まいがどこにあったか不明だが、1603年以後彼は3エーカーを保有し教会のすぐ傍に住んでいた。（第2区域北端）。

46 C.Marsh, *The Family of Love in English 1550-1630*(Cambridge,1994),pp.187-196.

ンリー・フロモントも遺言書作成にしばしば登場する人物であり、貧しい区域12もその圏内になる。

遺言立会人の選択は、若干距離を隔てたところからもなされているが、ごく近隣に住む者もまた立ち合うことを否定するものでもないのも確かなことである。ロバート・イングルとトマス・ボウルズ（区域2の北端）は2人とも遺言者ジョン・ラッグの遺言作成に立ち合っている。地図5（区域2）を見れば、この3人がじかの隣人同士であることがわかるであろう。思うに、遺言書立会人の選出は、単に社会的地位・年齢・親族であるかどうかだけでなしに、近隣に住んでいるということもまた条件の中に加えられる。そして、グレイヴ家・ピアソン家・ビダル家のような、裕福なもしくは影響力の大きい勢力のある家族は傾向として識字率も高く、それ故影響力をより大きく振るうことにもなったであろう。

以上遺言書作成の度合いは村落内でも高まっており、遺言作成補助者の選択は次第に各遺言作成者の置かれた状況により左右されるようになっていった。だがそれにもかかわらず、遺言書はある一定数ではあるが多くの勢力のある家族の間に集中を見せている。それは村落において遺言書作成がより形式的なものとなった結果でもあったと考えられる。

むすびにかえて

ウイリングムは教育への関心の高い教区であった。教会の指導もあったであろうが、長期にわたる個人もしくは村落の生活経験を通じて教育の重要性に対する認識が培われたと思われ、遺言書作成もその表現の一環とみなすべきであろう。他方、遺言書作成は教区民に教育の重要性を気づかせる契機ともなる。特に16世紀後半の短い間に多くの移入民を迎えるかたわら多くの死を目の前にして、人々はより確実な遺贈のための工夫とそれを裏付ける教育への深い関心を抱いたと思われる。沼沢など豊富な共同地を背景に物質的に恵まれることもあったが、1590年代のウイリングムは教育に高い関心を寄せる村落であり、そ

れが学校設立として結実したと思われる。それは村民の献金を基金とした全村を挙げての事業であり、必ずしも自分に子供がいなくとも近親に教育の恩恵を受けうる子弟がいれば自然と村の教育制度についても熱心になる、公私にわたる重要事であったと述べても極端な誤りとはなしえないのではないだろうか。